

仏教の土着化として見る法然浄土教について

佛教大学 市川定敬

◆日本仏教の源流

今日の日本仏教の特色として、僧侶の肉食妻帯に代表される世俗性ということが指摘できるであろう。僧侶の肉食妻帯は1872年（明治5）の太政官布告以降、公に行われるようになったということは言うまでもないが、留意すべき点は、僧侶の肉食妻帯の慣行化の後も日本仏教が存続していることである。つまり、この明治期の変化は日本仏教の本質に関わるものではなかったと考えられるのである。

このような関心から、法然浄土教について目を向けたい。鎌倉時代に開宗し当時の様々な身分に信仰され、今日にまで至る浄土宗の基層を形成したのは、半僧半俗の民間僧、いわゆる“ひじり”であったということである。

◆人間観に立脚した法然の浄土教

法然が開いた浄土宗は、この“ひじり”たちの集団であったということは、伊藤唯真氏等が指摘しているところである。日本における浄土教思想史という観点からすれば、円仁の五会念仏、源信の『往生要集』、そして南都における珍海や永観を経て専修念仏の法然が現れたと見ることもできるが、その一方で、空也からの市井における念仏聖の流れが最初期の法然教団を形成していることにも着目すべきである。そして、法然の教義思想レベルで、いかにしてこうした“ひじり”たちを受容しえたのかについて確認していきたい。

まず、法然の浄土宗開宗に至る三学非器の告白が注目される。法然は自身の修学過程において、戒・定・慧の習得に対する絶望を吐露している。これは単に三学を成し得ないということを意味するのではなく、これまでの比叡山において行われてきたところの仏教の範疇に自身が入り得ないことを意味する。したがって、法然においては従来の仏教ではない、新たな道が求められることとなり、これに応えたのが善導の浄土教であったのである。法然の教義書である『選択集』には阿弥陀仏が称名念仏を本願の行とした理由について法然自身の推論が見られるが、そこでは「念佛は易きが故に一切に通ず、諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然れば則ち一切衆生をして平等に往生せしめんが爲に、難を捨て易を取りて本願としたまへるか」と、多くの者が造像起塔や智慧高才には堪えられないことが論じられており、この中に持戒持律についても言及されている。このような人間観は、自身の三学非器を基盤とするものであるといえるだろう。さらに、『十二箇条の問答』には「又念佛の時、悪業の思はるる事は、一切の凡夫のくせ也。さりなからも往生の心さしありて念佛せば、ゆめゆめさわりとはなるへからず」と、凡夫の悪業を超越する阿弥陀仏の救済が説かれている。こうした教えは、仏典を読み解くこともなかったであろう市井の聖たちに対して、しかしながら彼らの行っていた口称念仏を教義的に裏付けたと見るとができるのである。

◆人間観の普遍性

法然の浄土宗開宗に至る内的契機は、法然自身の三学非器という現実との対峙であった。しかし、この問題は単に法然自身の問題ではなく、時代を超えた人間としての問題そのものであったといえるだろう。だからこそ、その解決は結果として当時の市井の人々の純朴な宗教的営みを教義的に裏づけることとなったのであり、ここに日本における仏教の土着化を見ることが出来る。また翻れば、時代の変化に左右されることのない現実生きる人間の感情、これを否定しないという法然浄土教の特質を指摘できるのである。

キーワード：聖仏教 世俗性 人間観